

2018 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

父親の関わりが大学生の共感性に及ぼす影響

指導教員（ 亀島信也 ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 11720003 氏名 勝田慶子

目 次

第 I 部 序論

序論・・・ 1

第 II 部 方法

方法・・・ 7

第 III 部 結果

第 1 章 先行研究の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

第 2 章 追加研究との関連・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

第 IV 部 考察

第 1 章 結果の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第 2 章 総合考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

参考文献・・・ 33

謝辞・・・ 35

付録・・・ 36

第 I 部 序論

序論

共感性研究が、近年急速に高まってきている。長谷川（2015）によると、外国からの人の流入や価値観が多様になった現代社会において、異なる立場を理解したり認めたり、多文化共生の実現を支える上でも共感性は主要な心であるという。そのように急速に進展しつつある共感性研究の社会的背景の一つとして、その原因は未解明だが発達障害児数が増加傾向にあり、社会的コミュニケーションの不全に社会の注目が注がれるようになった事が挙げられる。

確かに近年、発達障害に関する研究も進み、最近ではNHKでも「発達障害プロジェクト」として2017年5月から1年をかけて10の番組で当事者や家族の声を伝えたり、芸能人が自らの障害をカミングアウトするなど、一昔前に比べると発達障害に対する世間の認知度は、かなり高まってきたのではないかと推察される。ここへ至るまでの経緯の一つとして、2005年度に施行された発達障害者支援法においては、市町村は乳幼児の健康検査を行うにあたり、発達障害の早期発見に十分留意しなければならないと定められたという事が挙げられる。しかし、いくら早期発見をしても対処法や支援をする地域資源が不十分のままでは、養育者に不安を与えるだけになることも危惧され、これまでの調査によって発達障害の子どもたちが小学校入学後に学校不適應や心身症の状態に陥ることが少なくないということも分かってきた。そこで「気になる子どもたち」を就学前の5歳児検診、5歳児発達相談でもう一度スクリーニングしておこうという試みが始まり、鳥取県においてはいち早く2007年度より全ての市町村において5歳児検診または発達相談が実施されるようになり、現在では全国の自治体で徐々に広まってきている。また、5歳児検診においては保護者の困り感に寄り添うという事後相談を充実させることが重要で、その結果として就学後の不登校や学校不適應が減少したという報告があり（小枝、2017）、発達障害に対する支援体制は、現在このような状況にまで進歩してきているのである。

そのような発達障害に対する世の中の動きは、当事者やその養育者にとって非常に心強いソーシャルサポートとなり、また広く周囲の理解を深める事にも繋がっていくものと考えられる。ただ、その一方で、先の鳥取県でみられたように全市町村において5歳児検診または発達相談が実施されるようになった2007年頃以前に就学していた子どもたちや、その親世代の育った時代においては、世間の発達障害に対する認知度や各方面の対策、研究は今ほど進んでいなかったことが懸念される。筆者が調査したところ、まず、CiNii論文検索においては、「発達障害」のキーワードでヒットする研究論文数も2018年5月現在で15344件に対して、2007年末では5978件であったこと、次に、「診断やカウンセリング等を受けるために医療機関を受診した発達障害者数」が2014年には19.5万人へと増加し続けているのに対して、2002年では3.5万人であっ

たこと（厚労省調査）からも、2018年現在から10～15年前においては発達障害に対する認知度がかなり低かったことが推測される。「気になる子」であったことに起因する、学校生活でのつまずき、様々な人間関係、社会生活におけるつまずき、葛藤など様々な紆余曲折を経験し、大勢の人々が何故だか分からないまま、あるいは誤解や偏見を受けながら、大学生、社会人、親、祖父母となっている可能性があることを見過ごしてはならないのではないかと考える。現に今、「大人の発達障害」や、配偶者の発達障害に苦しむ「カサンドラ症候群」などが注目され始めてきている。「カサンドラ症候群」とは、自閉スペクトラム症のうち特にアスペルガー症候群の配偶者またはパートナーと情緒的な相互関係が築けないために配偶者やパートナーに生じる、身体的・精神的症状を表す言葉である。世間的には問題なく見えるパートナーへの不満を訴えても周囲に伝わりにくく、妻（夫）またはパートナーはさらに追い詰められることから、予言を信じてもらえなくなったギリシャ神話に登場するトロイの王女になぞらえてその呼び名が付くようになった（朝日新聞、2017.4.20）。発達障害の研究が進むにつれて、家庭や職場、学校において、これまでその原因がよく分からなかった様々な苦悩が今、次第にクローズアップされ始めてきている。

発達障害の中でも、特に自閉スペクトラム症（以下 ASD）の人は、DSM-5 によると「対人コミュニケーションの困難さ」と「こだわり、反復・常同行動」により診断されるという事であるが、「対人コミュニケーションの困難さ」では、他者と興味や感情を共有することが少ないこと、という項目があり、共感の能力には苦手さが見られることを示している（浅田、2017）。

コミュニケーションとは、人間において互いに意思や感情、思考を伝達し合うことであり、社会生活を送る上では必要不可欠であると考えられる。特に、他人同士であった二人が一つの家庭を築いていくという夫婦（パートナー）間においては、コミュニケーションの困難さは関係性を維持する上で致命傷となりかねない。もともと対人コミュニケーションに困難さを持ち合わせる発達障害の人の離婚率に関しては、通常でも離婚率が2組に1組となっているアメリカのデータで72%であり非常に高い確率となっていること、また、自閉症の子どもを持つアメリカの夫婦の離婚率は80%など、SNSなどを通して広く情報が発信されているという現状にある。それについては、日本においても古川ら（2009）の全国LD親の会会員を対象とした調査において、自閉症群の男女比は4:1であるという報告を行っていることや、橋本（2012）の研究においても、自閉スペクトラム症の有病率は少なくとも1～2%、遺伝率90%以上としていることから、何らかの発達特性を持つ子どもの、特に父親に、何らかの発達特性がある確率が高く、夫婦のコミュニケーションの困難等の事情で離婚という選択をするに至ったケースが少なからずあり得るのではないかと推測することが出来る。岡野ら（2012）による広汎性発達障害児（以下 PDD 児）をもつ母親の育児ストレスと父親のサポートの研究によると、これまでの多くの研究で、健常児を持つ母親の場合では、育児において父親（夫）からの情緒

的サポートが有用とされてきたが、PDD 児を持つ母親にとっては、子育ての困難さから母親に働きかけるサポートだけでなく、子どもの特性について夫婦で「共に考え」育児をすることが求められると報告している。つまり、父親にとっては「夫婦で話し合う」と認識していたことが、母親にとっては、単に「母親の話を聞く」と認識されており、コミュニケーションを取って夫婦で「よく話し合い子どもの特性を理解すること」が母親の育児満足度を高め、同時に PDD 児の母親は父親が「子どもに働きかけるサポート」も望んでいた。また、岡野らの調査においては、70%の夫婦はサポート内容の不一致が起こっており、父親と母親では子どもについて異なる障害認識を持っており、特に父親は子どもの障害に対して否定的な感情を持ち、障害を受容しにくいという指摘がある（山尾ら、2008）ように、育児において異なる意識を持っていると考えられるという見解が見られる。そのような父親の認識や態度については、仮に父親自身が何らかの発達特性を持ち合わせているにもかかわらず診断を受けずにこれまで過ごしてきた「大人の発達障害」であるとすれば白濱ら（2017）の指摘する ASD 児の困難性に関連する可能性も考えられる。その困難性とは、ASD 児は、他者の気持ちや考えを推測することの難しさに加え、相手の表情や行動、周囲で起こった出来事の状態など、他者の気持ちや考えを理解する上で必要な外的情報に注意を向ける機会自体が得難いとされること、ADHD 児は、注意の転導のしやすさから意見をまとめる事が苦手で、興奮すると不適切な言葉を思わず発するなど、自己表現の不器用さも見られるということである。ASD 者の中心的問題の一つとして、他者に共感することの難しさがあることも述べられており、ASD 児の場合は、他者の感情的な状態を知覚した際に、他者と関連付けて認識されず、自己の不快感としてのみ認識される個人的苦痛が起こりやすいとされているという（松崎ら、2016）。このような個人的苦痛を抱くことにより、ネガティブ感情を抱く他者に共感するのではなく、回避行動を行う事に繋がりやすいこと（Batson、2010）も指摘されている。

発達障害関係の情報としては、今、発達障害の当事者などによる自らの経験談や思い、対処法が SNS 上に多数掲載されており、中でも「発達障害は人の気持ちが分かりづらい、思いやりある行動というのが、悪意はなく本当に分かりません。」（発達障害情報ネット、2017.10.23）という生の声には、周囲がその症状を理解することや、直接関わる人たちが症状だと分かっているにもかかわらず心で割り切れない難しさがあることを切実にうかがわせる。

しかし、発達障害の特性をもつ人が、いくら自発的に思いやりのある行動や適切な行動や発言が分かり辛いとしても「学ぶ」、「気付く」、「教えられる」ことで対応することは可能であるはずであり、理解は出来ないけれど実際に行った行動や言動によって相手が喜んだり、幸せになったり、何らかの利益を得る事が分かれば、体験として身につけていくという事も考えられるのではないか。

そもそも日本では、小学校に入る前の 6 歳未満の子どもを持つ父親の一日の子育て時間は 40 分位で、他の欧米の主な国と比べて約半分の時間であり、子

育て以外の家事の時間を足しても日本の父親は1日1時間位しかなく欧米の主な国の男性と比べて約1/3の時間となっている（内閣府2011年度社会生活基本調査）。また、2012年に国際社会調査プログラム（ISSP）が実施した「家族と性役割に関する意識調査」でも、配偶者がいて18歳未満の子がいる男女が家事・育児・介護にかける週間平均時間でも、日本の男性が12.0時間、女性が53.7時間となり、男女合算に占める男性の割合が18.3%と世界で最も低いという結果が出ている。その原因としては、日本においては男性の働く時間が長いという事が挙げられ、総務省の「労働力調査」からは30代、40代の子育て世代の男性の就業時間が2015年では6人に1人が週に60時間以上働いている事が分かる。このような現代の日本の状況下においては、障害がある、無しに関わらず、夫婦はお互いを思いやる気持ちや共感的な関わりが必要であることが読み取れ、なおかつ、子育てにかかわる時間が少ないのであれば、関わりを高めることがなおさら望まれるのではないか。

ところで、共感という用語は、従来の心理学において統一した定義が得られないまま使われてきたが、一般に2つの定義に大別されてきた。「相手の感情を理解すること」を共感とする認知面を重視した定義と、「相手の気持ちを自分も同じように感じることを共感とする感情面を重視した定義である。Davis（1994）によれば「他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」と定義され、近年においては、認知と感情の両側面を包括する定義が優勢になってきている（山岸、1999）ことから、「他者の感情の理解も含めて、他者の感情を共有すること」（澤田、1998）と定義されることもあるようである。この共感性は、多くの研究において、対人関係や社会生活を円滑にする役割の一つとして挙げられており、顕著な例として、田村ら（2012）の報告による看護場面における看護師の患者への共感的態度によって患者が精神的に満たされる、という状況からも想像できるのではないかと推測する。また、共感性は、道徳的発達に不可欠である（Hoffman、1990）とも言われている。

井芹（2017）によれば、1990年代以降、「グローバル化」と呼ばれる現象（Ghemawat、2007）が起き、言語や、価値観、文化や習慣などが異なる「異質な他者」との相互交流が不可避となったこと（石戸、2007）で、多様性を理解する姿勢や、自律的・相互作用的な学びにつながる能力の一つとして、共感性は重要な位置を占めるものと考えられるという。さらに、対人関係の希薄化が叫ばれる今日、青年期における大学生は、社会人として円滑な人間関係を築いたり維持したりするためにどのような共感性を身につけて行く必要があるのかについて、調査を進める事が急務（鈴木ら、2000）であると報告している。

現在、大学生ということになると今から約20年前に誕生した世代であり、先に述べた鳥取県の全市町村で5歳児検診または発達相談が実施され始めた以前に就学していた子どもたちである割合が高い。つまり、大学生本人を始め、その養育者の世代も、就学前を含む複数の発達検診を受けずに育った世代である。

また、子どもの共感性については、親の養育態度が関係していると考えられ、日本においては母親の共感性は子どもの共感性に影響を与えるということが、渡辺ら（1986）をはじめ、これまで多くの研究で確かめられてきている。そのことから、母親の安定した愛情が幼児期にいかに関係するものであるかということがうかがわれるのであるが、母親の好ましい養育行動を促進するという観点からは、父親の協力的な関わりの重要性が指摘されている。また、父親の協力的関わりは夫婦関係の在り方に影響をもたらす（尾形、2004）、さらには、父親の養育行動と意識に最も影響を与える要因は夫婦関係満足である、と前原ら（2014）の先行研究によって報告されている。つまり、父親の養育は、妻との関係に満足していることが子どもへの関わりを促しており、家族を含めた支援の必要性が示唆されている。

このことから、子どもの共感性を含めた発達については、家族システムの中における夫婦、特に父親の在り方が重要であると考えられるが、我が国においては、これまでの多くの母子の研究に比べて父親の子どもに対する影響を調査した研究はまだ数少ない。その中で、辻道ら（2017）の大学生の親子関係と向社会行動および共感性との関連を調査した研究によると、男性においては、両親の受容性が高い群では共感性が高くなったが、女性においては母親の受容性が高い群では共感性が高かったが、父親の受容性は共感性と関係しないこと、また父親の統制性が高い群では共感性が低いという結果が出ており、家庭環境などの詳しい調査を合わせて行う事で、より興味深い研究となるものと考えられる。

海外における父親研究は、マイケル・ラム[Michael E. Lamb](1975)の最初の著書『子どもの発達における父親の役割』以降、アメリカを中心に盛んに行われてきている。1975年当初、ラムは父親を“忘れられていた子どもの発達へのもう一人の貢献者”だとしたが、英国政府出資機関である父親協会は「子の学習や達成に及ぼす父親の影響」(2010)の中で、出生直後からの父親の関与が子どもの言語発達や知能指数を高めるとしており、カナダ政府公衆衛生庁(2009)も父親の関与が子どもの認知機能や情動、社会性の発達、自己受容の促進や共感して人に関与するようになる等の影響を与えると報告している。このように、近年の欧米では、父親の関わりが子どもの発達に重要な役割を果たしていることが述べられている。

そこで、本研究では、母親・父親の夫婦関係が子どもの共感性にどのような影響を及ぼしているのかに関して検討する。父親の養育態度を促進する主要な要因である「夫婦関係満足度」については、ノートン(1983)が夫婦関係の全体の良さを反映する項目を限定して制作したQMI(Quality Marriage Index)を諸井(1996)が翻訳した『夫婦関係満足尺度』を使用して調査する。また、辻道ら(2017)の先行研究と同じく、辻岡・山本(1976)による「親子関係診断尺度」(EICA)を使用して子ども側から見た親子関係を測定し、「多次元共感性尺度」(鈴木・木野、2008)を使用して大学生の共感性を調査し、親子関係と共感性の関連を再検証する。本研究においては、辻道らの先行研究に保護者の「夫婦関係満足」を加えて調査し、夫婦関

係満足度が、子どもに対する養育態度にどのような影響を及ぼしているのか、また、子どもの共感性へどのような影響を及ぼしているのかを分析する。さらに、夫婦関係満足に関わる主要な要因として考えられる母親の「ソーシャルサポート」を調査し、ソーシャルサポートのある、無しで夫婦関係への影響や、父親、母親の子どもとの関わりに何らかの違いが見られるか、子どもの共感性にどのような影響があるか、家庭環境と子どもの共感性の関係などを探索的に調査していく。

なお、本研究においては、先述した先行研究の知見に基づき、①親子関係得点が高くなれば子どもの共感性も高くなる、②夫婦関係満足が高くなると親子関係得点・子どもの共感性得点が高くなる（特に夫婦関係満足が高い父親ほど子どもと積極的に関わりを持ち、親子関係得点・共感性得点も高くなる）、③高い夫婦関係満足は母親のソーシャルサポート得点も高い、④親の就労時間が短いほど子供と接する時間が増え、子どもの共感性を高める、という仮説を立て、⑤同居家族人数が多くなれば共感性は高くなるかについて等も調べながら、海外の研究結果に見られるように父親の関わりが子どもの共感性などの発達に影響を及ぼしているのかを探索的に検討して行く。

先述の通り、日本は子育て世代の父親の就労時間が長く、世界で一番、父親が育児や家庭サービスを行わない国という結果が出ている。その上に、子育て現役世代の父親をはじめ、それ以前の世代が発達検査を受けないまま現在に至っており、この先、育児や夫婦関係に悩む家庭の増加が危惧される。そこで、本研究は、これから社会に出て、いずれは家庭を築いて行くであろう大学生の共感性に着目し、夫婦関係との関連を検討しながら「父親の関わり」が子どもの精神発達にどのような影響を及ぼすかという事に気付く機会となることを第一の目的とした。また、父親が自身の役割や存在意義に自覚と主体性を持って子育てに関わることで、夫婦（パートナー）が互いの立場を共感的に理解し、接することが出来るようになると、ひいては子どもの精神発達にもよい影響を及ぼすという家族内の好循環が生まれるのではないだろうか。

共感能力は生得的なものである可能性が示唆される一方で、生後の経験や学習で、その能力が発達していくといった側面も指摘されている（山岸、1999）。筆者としては、本研究が、これまで発達検診において問題なく通過してしまった発達障害またはその疑いがある人、定型発達の人、それら全ての人にとって自らの共感能力を今一度振り返り、社会や家庭の中で、より良い人間関係を築き、より豊かな人生を送るための一助となることを願ってやまない。それを本研究の最終目的とする。

第Ⅱ部 方法

方法

1.調査期間、場所および状況

2018年10月1日～2018年11月9日の期間に大学の講義内で質問紙を配布・回収した。大学生に関しては、講義内で回答したものを回収、保護者の質問紙に関しては、学生が持ち帰り、保護者が回答したものを翌週を含め3週に渡って回収した。学生の回答時間はおよそ30分であった。

2.対象者

関西福祉科学大学の学生（1～4年生）343名と、その保護者を対象に調査を行った。なお、データ分析は回答漏れなどの欠損値がある対象者、フェイスシート以外に回答していない保護者を除いた56～58組の親子を対象として行った。男子学生183名、女子学生160名、父親56名、母親64名で、学生の平均年齢は19.85歳（18歳～26歳）、父親の年齢は40代前半～50代後半、母親の年齢は40代前半～60代前半であった。

3.質問紙

①学生対象質問紙

本研究で用いた学生対象の質問紙は、調査の教示、学生番号、年齢及び性別を尋ねるフェイスシートと以下の2尺度で構成されていた。親子関係を測定する尺度は父親、母親共に同じものであり、全項目を学生に回答させた。なお、学生に対する2尺度の質問紙は辻道ら（2017）の先行研究で使用したのと同じものを使用し、親子関係診断尺度（EICA）の算出方法に関しては、辻道らの粗点のみを扱った方法をより厳密にプロフィール表に沿って二次因子段階点までを算出し、多次元共感性尺度（MES）に関しては下位5尺度の得点まで算出した。

1) 親子関係診断尺度（EICA）（以下EICAとする：辻岡・山本、1976）

子ども側から見た親子関係を測定するものである。「私が困っているときには元気づけてくれる」などの情緒的支持（ES）、「ほかの誰よりも私といっしょにいたがる」などの同一化（ID）、「私が何をすべきかいつも私に注意したがる」などの統制（CO）、「何でも私がしたいようにさせてくれる」などの自律性（AU）の4因子から構成されている。各因子10項目ずつの合計40項目から成る。さらに、二次因子としてESとIDを総合したものを受容性—拒否性（以下、**受容性**とする）とし、AUの否定COを統合したものを統制性—自律性（以下、**統制性**とする）としている。

（下記に表を示す。）

一次因子	40 項目	二次因子
情緒的 支 持 (E S)	私の言う事に耳を傾けてくれる	受 容 性 (A C)
	いっしょにいと気持ちが楽になる	
	私が困っているときには元気づけてくれる	
	私のなやみや心配事を理解してくれる	
	いつも私の考えや意見に耳を傾けてくれる	
	私には友達がとても大事だという事を理解してく れる	
	私がどんな物の見方をしているのか理解しようと する	
	私といっしょに仕事をするときは、私の意見を聞 いてくれる	
	心配事をじっくり聞いてくれるので気持ちが楽に なる	
	私が喜ぶ本や雑誌を買ってくれたり、学校で役立 つことを教えてくれたりする	
同 一 化 (I D)	私にいろいろ気を使っている	
	いつも私を喜ばすことを考えている	
	他の誰かとよりも、私といっしょにいたがる	
	私にたびたびほほえみかける	
	私を喜ばそうとしていろいろなことをする	
	暇さえあれば、私に話かけたり私といっしょにい たがる	
	私の暇なときはたいてい、いっしょに過ごしてほ しいと思っている	
	友達と出かけるよりも、私といっしょに家にいる 方が好きだ	
	私のことを好きだということを態度であらわすべ きだと思っている	
	私が大きくなって、家の外で過ごす時間が増えて きたことを残念がっているようだ	
統 制 性 (C O)	私が家の手伝いをしないと腹を立てる	統 制 性 (C O)
	私が年長者に口答えするのを許さない	
	いつも私の性格を改めさせようとする	
	私が何をすべきか、いつも私に注意したがる	
	「なぜそんなことをしたのか説明しなさい」とし つこく言う	
	私が言いつけ通りにするまで、私を自由にさせて	

	くれない	
	私に何か言いつけると、それを守るまでやかましく言って聞かせる	
	私のためにたくさんのきまりや規則を作り、家の秩序を守ろうとする	
	私が悪いことをすれば、すべてなんらかの方法で罰しなければいけないと思っている	
	私が学校の勉強や家での雑用をなまけると、私を罰するのを当然のことだと思っている	
自律性 (AU)	なんでも私がしたいようにさせてくれる	
	私のやりたいときに宿題をやらせてくれる	
	好きなだけ外へ行かせてくれる	
	私がしたいことはどんなことでもさせてくれる	
	私が友達の家に一泊止まるのを許してくれる	
	学校が終わった後は、私の好きなことをさせてくれる	
	夜や週末は私の好きなように過ごさせてくれる	
	私が外へ行くとき何時に帰らなさいとは言わない	
	夜でも私が行きたいときには、いつでも外へ出してくれる	
	私の行きたい所なら、どこへでも何も聞かずに行かせてくれる	

「はい」「?」「いいえ」の3件法で回答させ、ES、ID、COの項目については「はい」を2点、「?」を1点、「いいえ」を0点として、AU項目については「いいえ」を2点、「?」を1点、「はい」を0点として得点を算出し、各粗点をプロフィール表に沿って算出し一次因子段階点を出し、ESとIDの合計値を二次因子段階点として受容性(AC)得点、同じく、AUとCOの合計値を二次因子段階点として統制性(CO)得点とした。因子全体の α 係数は $\alpha=.884$ であった。辻道ら(2017)の先行研究はEICAの採点方法(①～⑥)の採点方法の内、①の父・母の粗点のみを扱っているが、本研究における親子関係はEICAの採点方法に則り、下記の①～⑥の順に行い、先行研究では扱われなかった父母各々の単独類型(10種類)、父母の組合わせ類型(7種類)を決定した。

- ①父・母の各4尺度(ES・ID・CO・AU)の粗点を記入する。
- ②父母別に①の8個の粗点をプロフィールに転記する。
- ③一次因子段階点欄に一次因子の9段階点を記入する。
- ④父母別にAC得点、CO得点を記入する。
- ⑤親子関係診断座標上に④の父母各々の座標を求める。
- ⑥父母各々の単独類型(10種類)、父母の組合わせ類型(7種類)を決定する。

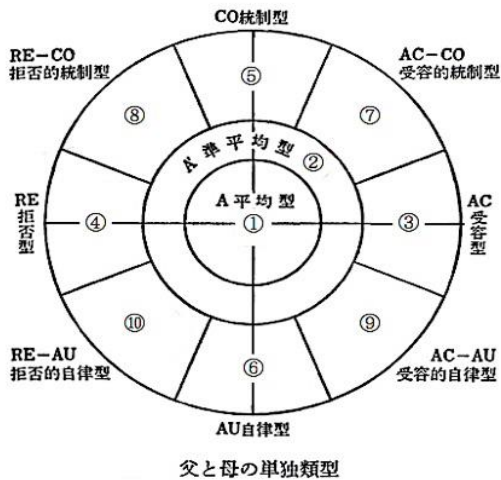
< 単独類型 (10 種類) >

1	A 型(平均型)	AC 得点、CO 得点が共に平均に近いもの(座標点が原点に近く半径 2 点の円内)。
2	A'型(準平均型)	A 型に近いもの(座標点半径 3 点の円内で A 型を除く)。
3	AC 型(受容型)	AC 得点が高いもの(受容性が高く、統制性がほぼ平均に近い型)。
4	RE 型(拒否型)	AC 得点が低いもの(拒否性が高く、統制性がほぼ平均に近い型)。
5	CO 型(統制型)	CO 得点が高く、AC 得点が平均に近い型。
6	AU 型(自律型)	CO 得点が低く、AC 得点が平均に近い型。
7	AC-CO 型(受容的統制型)	AC 得点、CO 得点が共に高い型。
8	RE-CO 型(拒否的統制型)	AC 得点が低く、CO 得点が高い型。
9	AC-AU 型(受容的自律型)	AC 得点が高く、CO 得点が低い型。
10	RE-AU 型(拒否的自律型)	AC 得点、CO 得点が共に低い型。

< 父母の組合わせ類型 (7 種) >

1	A 型(平均型)	父母共に単独類型が A 型のもの。
2	A'型(準平均型)	父または母が単独類型の A 型で他方が A'型のもの。
3	A''型(準々平均型)	父母共に A'型のもの。
4	B 型(同調型)	両親が子どもに対し共通の態度や行動を示すと子どもが感じているタイプ。
5	C 型(対立型)	父と母とが子どもに対して座標上(120°以上)で対立しているタイプ。
6	D 型(独立型)	父と母の態度は座標上(60°~120°)でバラバラである。
7	B'型(協調型)	B 型(同調型)に近いが、やや父母の色合いが異なるタイプ。

< 単独類型 10 種 >



2) 多次元共感性尺度 (MES) (以下 MES とする : 鈴木・木野、2008)

他者の心理状態に対する認知・情動の反応傾向を測定する尺度であり、共感性の下位概念に対応した 5 つの下位尺度から構成されている。なお、この尺度は、他者の苦痛だけでなく快感情への反応傾向を含めて測定するため、「共感的苦痛」は「他者指向的反応」、「個人的苦痛」は「自己指向的反応」として表されている。具体的には、認知的側面として「自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのか分かってほしい」とするなどの視点取得 (5 項目)、「面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する」などの想像性「5 項目」、情動的側面として「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる」などの他者指向的反応 (5 項目)、「他人の失敗する姿を見ると、自分はそうなりたくないと思う」などの自己指向的反応 (4 項目)、「まわりの人がそうだといえ、自分もそうだと思う」となるなどの被影響性 (5 項目) の合計 24 項目から構成されている。

(下記に表を示す。)

< 多次元共感性尺度の 5 因子と 24 項目 >

被影響性	まわりの人がそうだといえ、自分もそう思えてくる。
	* 自分の信念や意見は、友人の意見によって左右されることはない。
	物事を、まわりの人の影響を受けずに自分一人で決めるのが苦手だ。
	自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい。
	* 他人の感情に流されてしまうことはない。
他者指向的反応	悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。
	* 悩んでいる友だちがいても、その悩みを分かち合うことができない。
	* 他人が失敗しても同情することはない。
	人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なく

	でも応援したくなる。
	まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するとういいなあと思う。
想像性	面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する。
	*小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない。
	空想することが好きだ。
	自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする。
	感動的な映画を見た後は、その気分いつまでも浸ってしまう。
視点取得	自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。
	人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。
	人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。
	常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。
	*相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない。
自己指向的反応	他人の失敗する姿を見ると、自分はそうなりたくないと思う。
	苦しい立場に追い込まれた人を見ると、それが自分の身に起こったことでなくてよかったと心の中で思う。
	他人の成功を見聞きしているうちに、焦りを感じることが多い。
	他人の成功を素直に喜べないことがある。

*は逆転項目

各項目について、「全く当てはまらない（1点）」～「とてもよく当てはまる（5点）」までの5件法で回答させた。逆転項目を処理した後、規定に従い各下位尺度ごとに得点を合計し、下位尺度得点を算出した。5尺度の α 係数は被影響性 $\alpha = .802$ 、他者指向反応 $\alpha = .696$ 、想像性 $\alpha = .728$ 、視点取得 $\alpha = .709$ 、自己指向的反応 $\alpha = .642$ であった。

②保護者対象質問紙

本研究で用いた保護者対象の質問紙は、父親、母親共に、調査の教示、年齢、職業、勤務状態、一週間の就労時間、休みの割合、結婚期間、同居家族の内訳、最終学歴を尋ねるフェイスシートと、夫婦の関係性を測定する尺度で構成されている。文献検討で述べたように厚労省調べによる平成30年度母子世帯数が、ひとり親家庭の約85%、25年間で1.5倍に増加している昨今の家庭状況を背景に想定したことから、母親にのみソーシャルサポートを測定する尺度を加えた。

1) 夫婦関係満足尺度 (QMI) (以下 QMI とする: 諸井、1996)

同じ質問内容のものを父親用、母親用として用意し、夫婦関係の満足度について

て、それぞれが回答する尺度である。夫婦の関係全体の良さを反映する 6 項目に限定して作成されており、「ほとんどあてはまらない (1 点)」～「かなりあてはまる (4 点)」の 4 件法で回答させ、6 項目の単純合計得点を夫婦関係満足得点とした。尺度の信頼性を示す Cronbach の α 係数を算出したところ、母親は $\alpha = .954$ 、父親は $\alpha = .954$ であった。

2) 家族サポート (FSS) (以下 FSS とする: 北川・七木田・今塩屋、1995)

母親のみを対象として北川ら (1995) の健常幼児をもつ母親の家族サポート (FSS) 14 項目に「該当項目なし」の 1 項目を加えた 15 項目を「全く助けにならない (1 点)」～「とても助けになる (4 点)」の 4 件法で回答させ α 係数を算出したところ $\alpha = .964$ であった。

北川ら (1995) によると、ソーシャルサポートの捉え方には二つあり、知覚されたサポートと実行されたサポートという複合的な見地から捉える事が出来るという。本尺度は、知覚されたサポートとして用いられており、母親自身のサポートに対する知覚が日頃の母親の心理的安寧に大きく寄与していると考えられるという。そこで、本研究では、本尺度と、夫婦関係満足と大学生の共感性、親子関係との相関を調査し、母親のソーシャルサポートが子どもの共感性発達や親の養育態度、夫婦関係満足とどのような関連が見られるのかを調査する。

第Ⅲ部 結果

第1章 先行研究の検証

各得点の記述統計量及び性差

各得点について、全体および男女別の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。辻道ら（2017）の先行研究と違い、全ての得点で女性の方が高いという結果は得られず、男性の方が、視点取得、父 AC（受容性）、父 CO（統制性）、母 CO（統制性）の得点が高かった。そのため、全項目を対応のない t 検定で性差について検討したところ、被影響性（ $t=-2.16$ 、 $df=311$ 、 $p<.05$ ）にのみ性差間で有意な差が見られた。

Table 1 各得点の全体および男女別の平均値と標準偏差

得点名		被影響性	他者指向的反応	想像性	視点取得	自己指向的反応	大学生共感性尺度合計	父AC	母AC	父CO	母CO	父親の夫婦満足度総得点	母親の夫婦満足度総得点	母のソーシャルサポート合計点
男性	<i>M</i>	15.16	18.42	17.27	17.69	14.14	82.80	10.76	11.06	6.55	6.59	18.27	17.19	2.49
	<i>SD</i>	4.117	3.079	4.002	3.226	2.980	10.259	3.840	3.990	3.176	3.509	3.539	3.441	6.659
女性	<i>M</i>	16.14	18.65	18.23	17.13	14.18	84.52	10.71	11.09	6.38	5.88	20.35	18.29	3.78
	<i>SD</i>	4.181	3.156	3.702	3.154	2.836	9.131	4.133	4.058	3.369	3.390	5.083	5.503	8.636
全体	<i>M</i>	15.62	18.53	17.72	17.42	14.16	83.63	10.73	11.08	6.47	6.26	19.31	17.76	3.09
	<i>SD</i>	4.170	3.113	3.887	3.200	2.909	9.754	3.971	4.016	3.262	3.467	4.461	4.617	7.661

親子関係と共感性との関連（序論 仮説①の結果）

親子関係の受容性得点および統制性得点について、平均値を基準として高群と低群に分け、分析を行った。Table 1 の全体の平均値より、父親の受容性得点については 2 点~10 点までを低群（男性： $n=81$ 、女性： $n=65$ ）、11 点~18 点を高群（男性： $n=92$ 、女性： $n=82$ ）とし、統制性得点は 2 点~6 点までを低群（男性： $n=93$ 、女性： $n=86$ ）、7 点~18 点を高群（男性： $n=80$ 、女性： $n=61$ ）とした。母親の受容性得点については 2 点~11 点までを低群（男性： $n=86$ 、女性： $n=76$ ）、12 点~18 点を高群（男性： $n=89$ 、女性： $n=77$ ）とし、統制性得点は 2 点~5 点までを低群（男性： $n=99$ 、女性： $n=92$ ）、6 点~18 点を高群（男性： $n=76$ 、女性： $n=61$ ）とした。

Table 2 に親子関係の群における共感性得点の平均値と標準偏差を男女別に示した。序論における仮説①（親子関係得点が高くなれば子どもの共感性も高くなる）を検討するため、共感性得点について各親子関係の高低二群間の差を対応のない t 検定で比較した。男女別に行ったところ、女性の父親の統制性（ $t=-2.489$ 、 $df=140$ 、 $p<.05$ ）の高低二群間でのみ有意な差が見られた。その他に関しては有意な差は見られなかったが、高低二群間の共感性得点男女別平均値は、男子の母親の統制性得点を除いて、全て高群の平均値が高かった。しかし、男性の母親の統制性得点の高低二群

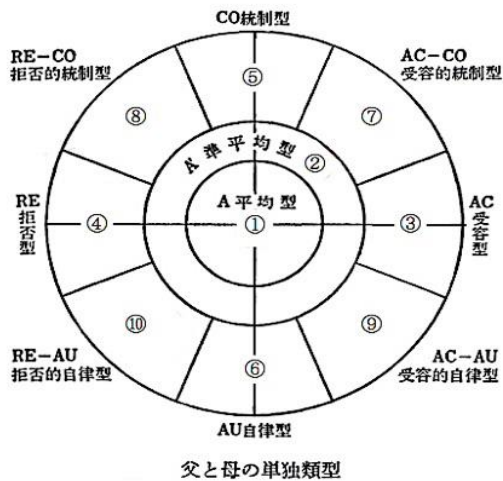
の平均値もほとんど差はなく、男性に関しては、父親、母親の受容性、父親の統制性の得点が高いほど共感性が高くなることが示された。また、女性に関しては、母親、特に父親の統制性、父親、母親の受容性得点が高くなるほど共感性が高くなることが示された。

Table 2 親子関係と共感性得点の男女別の平均と標準偏差

親子関係の群			男性		女性	
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
受容性	父親	高群	83.70	10.28	85.54	9.25
		低群	81.38	10.36	83.03	9.16
	母親	高群	83.89	10.81	84.83	8.31
		低群	81.66	9.72	83.82	9.77
統制性	父親	高群	83.59	10.18	86.66	9.13
		低群	81.83	10.49	82.81	9.07
	母親	高群	82.80	10.58	85.69	8.68
		低群	82.84	10.21	83.43	9.21

親子関係診断尺度の結果

男性と女性の共感性得点を Table 1 の全体の平均値を基準として高低二群に分け、1~10型に分けられた父と母の単独類型に分布する父親・母親の各人数の表と棒グラフを Table 3 に示した。共感性得点の 0 点~83 点を高群(男性: $n=80$, 女性: $n=84$)、84 点~120 点を低群(男性: $n=85$, 女性: $n=70$) 共に父・母の単独類型は 9 (受容的自律型) が多く、次に 6 (自律型) が多かった。高群より低群の方が 10 (拒否的自律型) が多く、5 (統制型) が父型に 1 人いるだけでほぼいなかった。このことから、拒否性の対局である受容性が高く、統制性がないよりはある方が共感性は高くなる傾向にあることが示された。父母型は高群、低群共に 4 (同調型) が最も多く、次に 4 (同調型) に近い 7 (協調型) が多く、子どもの共感性の高低群間で父母型に差が無いことが示された。このことから子どもに対して共通の態度や行動を示す夫婦が多いことが示された。父・母の 1~10 型と父母型は下記の通りである。



< 父と母の単独類型（10種類） >

1	（平均型）	受容得点、統制得点が共に平均に近いもの
2	（準平均型）	平均型に近いもの
3	（受容型）	受容性が高く、統制性がほぼ平均に近い型
4	（拒否型）	拒否性が高く、統制性がほぼ平均に近い型
5	（統制型）	統制得点が高く、受容得点が平均に近い型。
6	（自律型）	統制得点が低く、受容得点が平均に近い型。
7	（受容的統制型）	受容得点、統制得点が共に高い型。
8	（拒否的統制型）	受容得点が低く、統制得点が高い型。
9	（受容的自律型）	受容得点が高く、統制得点が低い型。
10	（拒否的自律型）	受容得点、統制得点が共に低い型。

< 父母型（7種） >

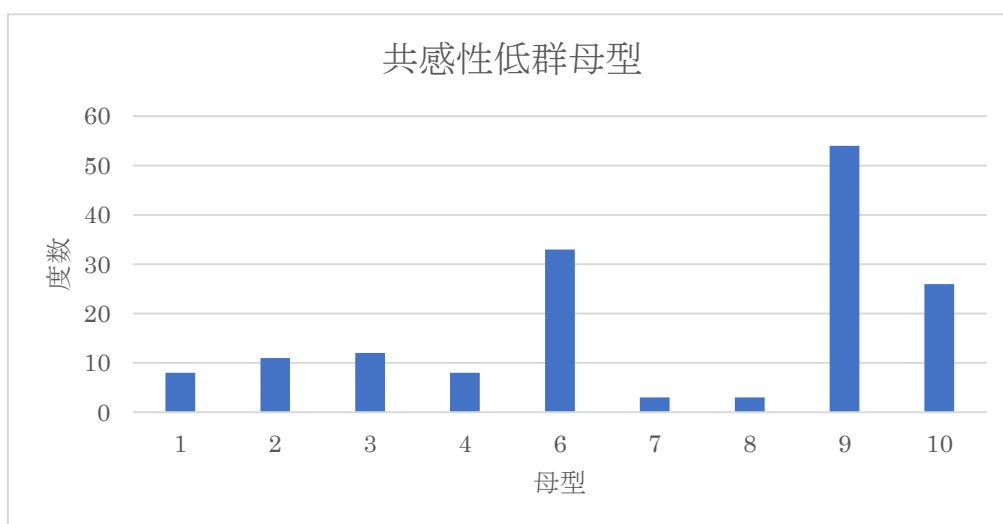
1	（平均型）	父母共に単独類型が平均型のもの。
2	（準平均型）	父または母が単独類型が平均型で他方が準平均型のもの。
3	（準々平均型）	父母共に準平均型のもの。
4	（同調型）	両親が子どもに対し共通の態度や行動を示すと子どもが感じているタイプ。
5	（対立型）	父と母とが子どもに対して対立しているタイプ。
6	（独立型）	父と母の態度はてんでバラバラである。
7	（協調型）	（同調型）に近いが、やや父母の色合いが異なるタイプ。

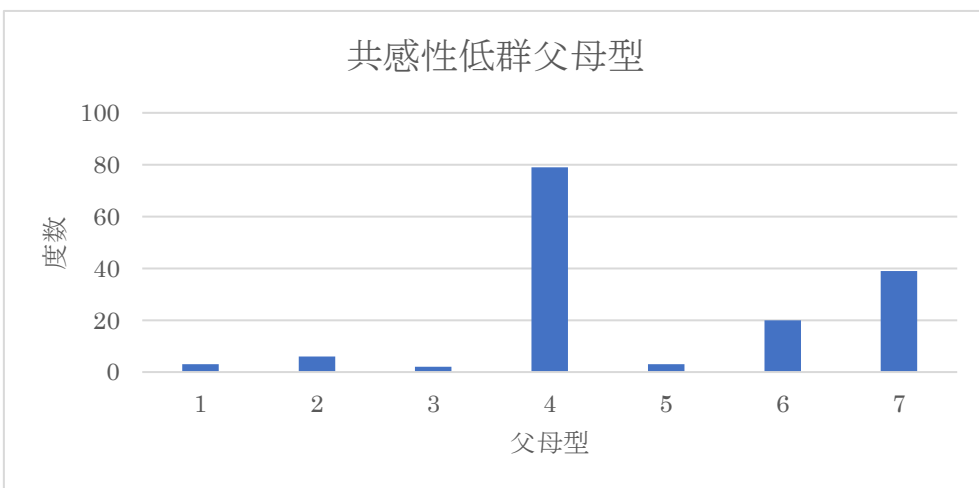
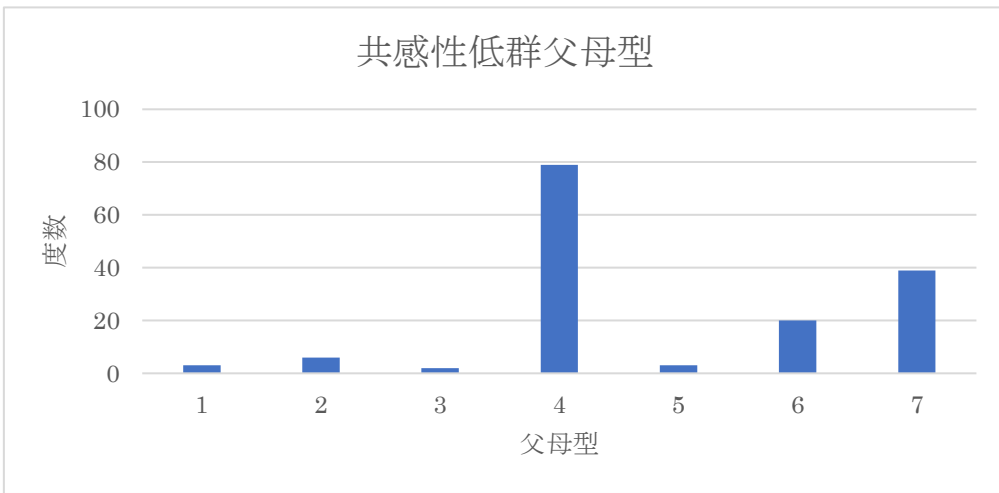
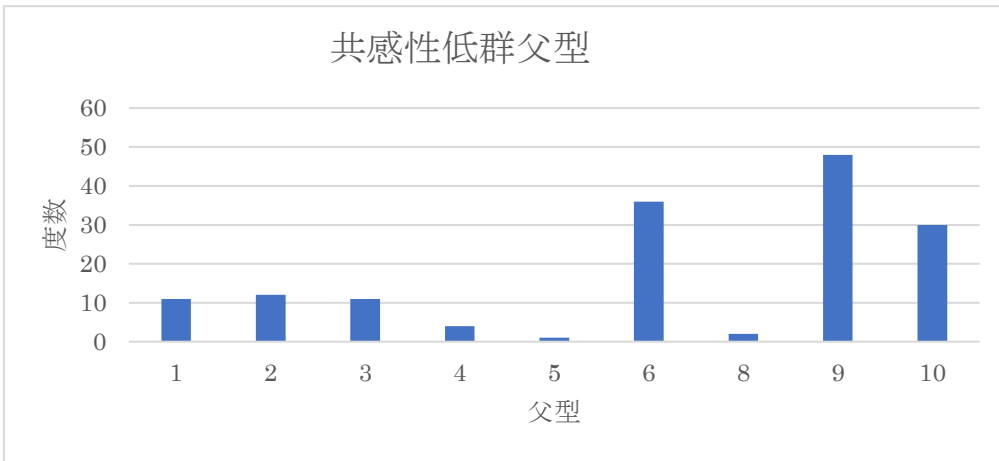
Table 3 共感性高低群の父型・母型・父母型の人数とグラフ

< 共感性低群 >

		統計量		
		父型	母型	父母型
度数	有効	155	158	152
	欠損値	13	10	16

父型	(人)	母型	(人)	父母型	(人)
1	11	1	8	1	3
2	12	2	11	2	6
3	11	3	12	3	2
4	4	4	8	4	79
5	1	6	33	5	3
6	36	7	3	6	20
8	2	8	3	7	39
9	48	9	54	合計	152
10	30	10	26	欠損値	16
合計	155	合計	158	合計	168
欠損値	13	欠損値	10		
合計	168	合計	168		

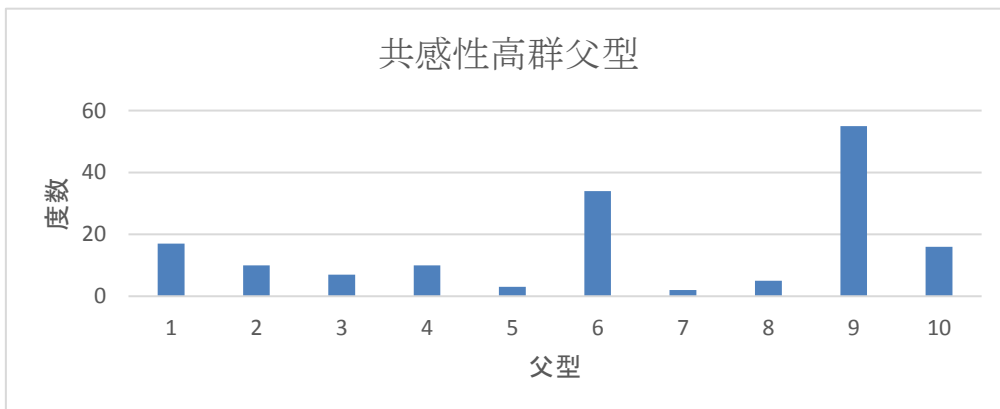


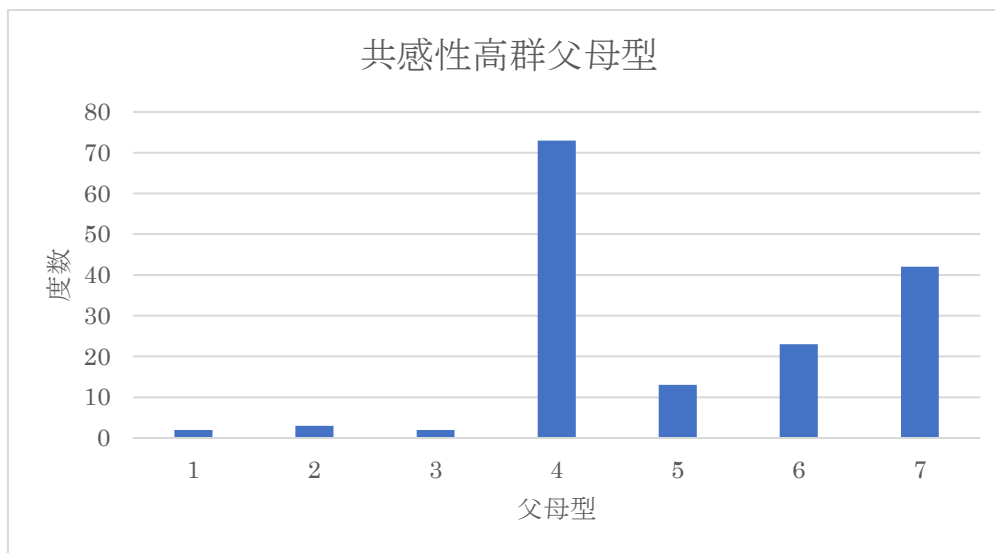
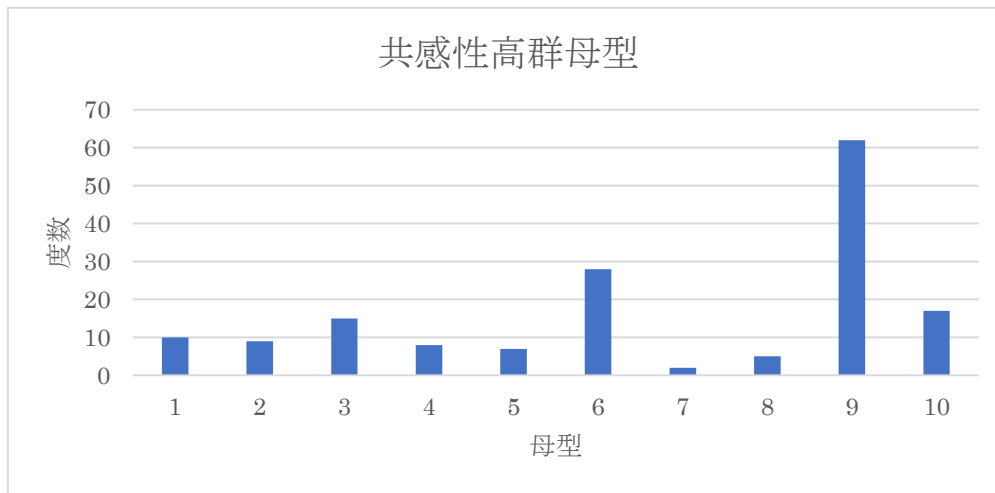


< 共感性高群 >

共感性高群人数				
		父型	母型	父母型
度数	有効	159	163	158
	欠損値	16	12	17

父型	(人)	母型	(人)	父母型	(人)
1	17	1	10	1	2
2	10	2	9	2	3
3	7	3	15	3	2
4	10	4	8	4	73
5	3	5	7	5	13
6	34	6	28	6	23
7	2	7	2	7	42
8	5	8	5	合計	158
9	55	9	62	欠損値	17
10	16	10	17	合計	175
合計	159	合計	163		
欠損値	16	欠損値	12		
合計	175	合計	175		





第2章 追加研究との関連

夫婦関係満足と親子関係、子どもの共感性、母親のソーシャルサポートとの関連（序論 仮説②③の結果）

夫婦関係満足度が高くなれば親子関係得点、子どもの共感性得点も高くなる、また、高い夫婦関係満足度は高い母親のソーシャルサポート得点に支えられているかを検討するため、父親、母親の夫婦関係満足度、父親、母親の受容性（以下AC）得点・統制性（以下CO）得点、大学生の共感性総得点、共感性下位5尺度（被影響性、他者指向的反応、想像性、視点取得、自己指向的反応）の各得点、母親のソーシャルサポート得点の相関をスピアマンのノンパラメトリック検定で分析した。父親、母親の各々の夫婦関係満足度を高群、低群に分けて相関分析を行い、高低群間の差を見るために対応のない t 検定を行ったものを

Table 4 に示した。Table 1 の全体の平均値より、父親の夫婦関係満足度については 0 点~19 点までを低群 ($n=26$)、20 点~24 点を高群 ($n=30$) とし、母親の夫婦関係満足度については 0 点~17 点までを低群 ($n=25$)、18 点~24 点を高群 ($n=33$) とした。

分析の結果は、父親の夫婦満足度低群では、父 AC と母 AC に 1%水準、父 CO と母 CO に 5%水準の正の相関、父 CO と視点取得に 5%水準の負の相関、被影響性、想像性、自己指向的反応と大学生共感性総得点に 1%水準の正の相関が見られた。

父親の満足度高群では、父 AC と母 AC に 1%水準の正の相関、母 AC と父 CO、自己指向的反応に 1%水準の負の相関、父 CO と母 CO、被影響性に 1%水準の正の相関、母 CO と被影響性に 5%水準、大学生共感性総得点に 1%水準の正の相関、母親の夫婦関係満足度に 5%水準の負の相関が見られた。また、大学生共感性総得点と被影響性と想像性に 1%水準、他者指向的反応と視点取得に 5%水準の正の相関、他者指向的反応と母親の夫婦満足度に 5%水準の負の相関が見られた。視点取得と母親のソーシャルサポートには 1%水準の負の相関が見られた。

母親の満足度低群では、父 AC と父親の夫婦満足度に 1%水準の負の相関、母 AC と父親の夫婦満足度に 5%水準の負の相関、父 CO と母 CO に 1%水準、被影響性に 5%水準の正の相関、母 CO と被影響性に 1%水準の正の相関、被影響性、想像性、自己指向的反応と大学生共感性総得点に 1%水準の正の相関が見られた。また、他者指向的反応と父親の夫婦満足度に 1%水準の負の相関が見られた。

母親の夫婦満足度高群では、父 AC と母 AC、父 CO と母 CO に 1%水準の正の相関、大学生共感性総得点と被影響性、他者指向的反応、想像性、視点取得に 1%水準、自己指向的反応に 5%水準の正の相関が見られた。また、視点取得と母親のソーシャルサポートには 5%水準の負の相関が見られた。

父親の夫婦関係満足度の高低二群間で平均値の差を見たところ、高群の方の平均値が高かったのは、父 AC、他者指向的反応、視点取得、母親の夫婦関係満足度、母親のソーシャルサポートであった。対応のない T 検定を行った結果、母親の夫婦関係満足度 ($t=-.4.70$, $df=52$, $p<.001$) に高低間で有意な差が見られたのみであった。

母親の夫婦関係満足度の高低二群間で平均値の差を見たところ、高群の方の平均値が高かったのは、父 AC、母 AC、他者指向的反応、想像性、視点取得、父親の夫婦関係満足度、母親のソーシャルサポートであった。対応のない t 検定を行った結果、高低間で有意な差が見られたのは、父 AC ($t=-3.57$, $df=56$, $p<.001$)、自己指向的反応 ($t=2.33$, $df=55$, $p<.05$)、母親の夫婦関係満足度 ($t=-8.53$, $df=56$, $p<.001$) であった。

これらのことから父親の夫婦関係満足度が高ければ、父親の受容性 (AC)、他者指向的反応、視点取得、母親の夫婦関係満足度、母親のソーシャルサポー

トが高くなり、母親の夫婦関係満足度が高ければ父親と母親の受容性（AC）、他者指向的反応、想像性、視点取得、父親の夫婦関係満足度、母親のソーシャルサポートが高くなることが示された。父親、母親の夫婦関係満足度高群の二者間での違いは、母親の方に想像性が高くなるという事が示されたことのみであった。

Table 4 高低群で分けた夫婦関係満足度と親子関係、共感性、母親のソーシャルサポートとの相関 および それらの t 検定

父親の夫婦関係満足 低群														
		父AC	母AC	父CO	母CO	被影響性	他者指向的 反応	想像性	視点取得	自己指向的 反応	大学生共 感性尺度 合計	母親の夫 婦満足度 総得点	母のソーシ ャルサポ ート合計点	
Spearmanの ロー	父AC	相関係数	1.000	.593**	.076	.286	-.040	-.015	-.108	.052	.040	-.094	.236	
		有意確率 (両側)		.001	.711	.157	.845	.944	.598	.800	.849	.654	.256	.140
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
	母AC	相関係数	.593**	1.000	.001	.131	.105	.169	-.124	.227	.434*	.157	.041	-.375
		有意確率 (両側)	.001		.997	.525	.609	.410	.547	.266	.030	.453	.845	.078
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
	父CO	相関係数	.076	.001	1.000	.444*	.145	.100	.046	-.461*	.048	.045	.074	-.195
		有意確率 (両側)	.711	.997		.023	.480	.628	.823	.018	.818	.830	.727	.373
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
	母CO	相関係数	.286	.131	.444*	1.000	.328	-.004	.111	-.101	.015	.138	.322	-.202
		有意確率 (両側)	.157	.525	.023		.102	.984	.590	.623	.944	.510	.116	.354
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
	被影響性	相関係数	-.040	.105	.145	.328	1.000	.253	.248	-.001	.343	.673**	.106	.008
		有意確率 (両側)	.845	.609	.480	.102		.212	.222	.998	.093	.000	.615	.970
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
	他者指向的 反応	相関係数	-.015	.169	.100	-.004	.253	1.000	-.198	.257	.050	.230	-.232	-.033
		有意確率 (両側)	.944	.410	.628	.984	.212		.333	.205	.811	.269	.263	.882
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
	想像性	相関係数	-.108	-.124	.046	.111	.248	-.198	1.000	.039	.403*	.751**	.293	-.331
		有意確率 (両側)	.598	.547	.823	.590	.222	.333		.850	.046	.000	.156	.122
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
	視点取得	相関係数	.052	.227	-.461*	-.101	-.001	.257	.039	1.000	-.066	.293	-.331	-.033
		有意確率 (両側)	.800	.266	.018	.623	.998	.205	.850		.755	.155	.106	.882
		度数	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	23
自己指向的 反応	相関係数	.040	.434*	.048	.015	.343	.050	.403*	-.066	1.000	.512**	.028	-.231	
	有意確率 (両側)	.849	.030	.818	.944	.093	.811	.046	.755		.009	.897	.301	
	度数	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	24	22	
大学生共 感性尺 度合計	相関係数	-.094	.157	.045	.138	.673**	.230	.751**	.293	.512**	1.000	.081	-.230	
	有意確率 (両側)	.654	.453	.830	.510	.000	.269	.000	.155	.009		.705	.304	
	度数	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	24	22	
母親の夫 婦満足 度総得 点	相関係数	.236	.041	.074	.322	.106	-.232	.293	-.331	.028	.081	1.000	.206	
	有意確率 (両側)	.256	.845	.727	.116	.615	.263	.156	.106	.897	.705		.346	
	度数	25	25	25	25	25	25	25	25	24	24	24	23	
母のソーシ ャルサ ポート 合計点	相関係数	-.317	-.375	-.195	-.202	.008	-.033	-.331	-.033	-.231	-.230	.206	1.000	
	有意確率 (両側)	.140	.078	.373	.354	.970	.882	.122	.882	.301	.304	.346		
	度数	23	23	23	23	23	23	23	23	22	22	23	23	

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。
* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

母親の夫婦関係満足 高群

		父AC	母AC	父CO	母CO	被影響性	他者指向的 反応	想像性	視点取得	自己指向的 反応	大学生共 感性尺度 合計	母のソー シャルサ ポート合 計点	父親の夫婦満足 度総得点	
Spearmanの ロー	父AC	相関係数	1.000	.718**	-.046	.009	-.224	-.107	.021	.033	-.334	-.215	-.027	
		有意確率 (両側)		.000	.799	.961	.210	.554	.907	.853	.062	.236	.884	.764
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
	母AC	相関係数	.718**	1.000	-.250	.057	-.255	-.014	.045	.144	-.322	-.181	-.116	-.100
		有意確率 (両側)	.000		.160	.754	.152	.939	.805	.424	.072	.322	.534	.586
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
	父CO	相関係数	-.046	-.250	1.000	.515**	.316	-.023	.167	-.133	.187	.241	-.290	-.175
		有意確率 (両側)	.799	.160		.002	.073	.898	.354	.461	.305	.184	.114	.339
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
	母CO	相関係数	.009	.057	.515**	1.000	.178	.086	.310	.079	-.036	.335	-.355	-.303
		有意確率 (両側)	.961	.754	.002		.322	.636	.079	.662	.846	.061	.050	.092
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
	被影響性	相関係数	-.224	-.255	.316	.178	1.000	-.047	.213	-.011	.505**	.648**	.092	-.219
		有意確率 (両側)	.210	.152	.073	.322		.793	.234	.952	.003	.000	.622	.229
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
	他者指向的 反応	相関係数	-.107	-.014	-.023	.086	-.047	1.000	.175	.472**	-.167	.482**	-.155	.221
		有意確率 (両側)	.554	.939	.898	.636	.793		.329	.006	.360	.005	.405	.223
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
	想像性	相関係数	.021	.045	.167	.310	.213	.175	1.000	.144	-.071	.602**	-.140	.068
		有意確率 (両側)	.907	.805	.354	.079	.234	.329		.422	.701	.000	.451	.711
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
	視点取得	相関係数	.033	.144	-.133	.079	-.011	.472**	.144	1.000	.066	.526**	-.409*	.270
		有意確率 (両側)	.853	.424	.461	.662	.952	.006	.422		.721	.002	.022	.134
		度数	33	33	33	33	33	33	33	33	32	32	31	32
自己指向的 反応	相関係数	-.334	-.322	.187	-.036	.505**	-.167	-.071	.066	1.000	.383*	-.103	-.024	
	有意確率 (両側)	.062	.072	.305	.846	.003	.360	.701	.721		.030	.590	.898	
	度数	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	30	31	
大学生共 感性尺 度合計	相関係数	-.215	-.181	.241	.335	.648**	.482**	.602**	.526**	.383*	1.000	-.166	.121	
	有意確率 (両側)	.236	.322	.184	.061	.000	.005	.000	.002	.030		.380	.518	
	度数	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	30	31	
母のソー シャル サポ ート 合計 点	相関係数	-.027	-.116	-.290	-.355	.092	-.155	-.140	-.409*	-.103	-.166	1.000	.086	
	有意確率 (両側)	.884	.534	.114	.050	.622	.405	.451	.022	.590	.380		.647	
	度数	31	31	31	31	31	31	31	31	30	30	31	31	
父親の夫婦満足 度総得点	相関係数	-.055	-.100	-.175	-.303	-.219	.221	.068	.270	-.024	.121	.086	1.000	
	有意確率 (両側)	.764	.586	.339	.092	.229	.223	.711	.134	.898	.518	.086		
	度数	32	32	32	32	32	32	32	32	31	31	31	32	

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

父親の夫婦関係満足度高低二群間のT検定					
父親の満足度の高低		度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
父AC	低い	26	11.50	3.881	.761
	高い	30	12.00	3.504	.640
母AC	低い	26	12.62	3.732	.732
	高い	30	12.07	4.068	.743
父CO	低い	26	6.42	2.996	.587
	高い	30	5.80	2.696	.492
母CO	低い	26	6.08	3.310	.649
	高い	30	5.97	3.538	.646
被影響性	低い	26	17.85	3.529	.692
	高い	30	15.83	4.963	.906
他者指向的反応	低い	26	18.46	2.716	.533
	高い	30	18.90	3.294	.601
想像性	低い	26	18.04	4.303	.844
	高い	30	18.03	4.214	.769
視点取得	低い	26	16.50	3.036	.595
	高い	30	17.30	3.131	.572
自己指向的反応	低い	25	15.20	2.930	.586
	高い	30	14.23	2.431	.444
大学生共感性尺度合計	低い	25	86.08	9.197	1.839
	高い	30	84.30	9.820	1.793
父親の夫婦満足度総得点	低い	26	15.65	3.463	.679
	高い	30	22.40	2.078	.379
母親の夫婦満足度総得点	低い	25	15.76	3.778	.756
	高い	29	20.24	3.226	.599
母のソーシャルサポート合計	低い	23	17.78	8.501	1.773
	高い	29	19.93	7.401	1.374

父親の夫婦関係満足度高低二群間のT検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
									下限	上限
父AC	等分散を仮定す	.726	.398	-.507	54	.614	-.500	.987	-2.479	1.479
	等分散を仮定しない			-.503	50.900	.617	-.500	.994	-2.496	1.496
母AC	等分散を仮定す	.838	.364	.523	54	.603	.549	1.049	-1.555	2.652
	等分散を仮定しない			.526	53.809	.601	.549	1.043	-1.542	2.639
父CO	等分散を仮定す	.631	.431	.819	54	.416	.623	.761	-.902	2.148
	等分散を仮定しない			.813	50.827	.420	.623	.766	-.916	2.162
母CO	等分散を仮定す	.005	.942	.120	54	.905	.110	.920	-1.735	1.955
	等分散を仮定しない			.120	53.664	.905	.110	.916	-1.726	1.946
被影響性	等分散を仮定す	3.000	.089	1.724	54	.090	2.013	1.168	-.328	4.354
	等分散を仮定しない			1.765	52.130	.083	2.013	1.140	-.275	4.301
他者指向的反応	等分散を仮定す	.265	.609	-.538	54	.593	-.438	.815	-2.072	1.195
	等分散を仮定しない			-.546	53.882	.588	-.438	.803	-2.049	1.172
想像性	等分散を仮定す	.049	.827	.004	54	.996	.005	1.140	-2.281	2.291
	等分散を仮定しない			.004	52.538	.996	.005	1.142	-2.286	2.296
視点取得	等分散を仮定す	.045	.832	-.967	54	.338	-.800	.827	-2.459	.859
	等分散を仮定しない			-.969	53.292	.337	-.800	.825	-2.455	.855
自己指向的反応	等分散を仮定す	.321	.574	1.338	53	.187	.967	.723	-.483	2.416
	等分散を仮定しない			1.315	46.713	.195	.967	.735	-.512	2.446
大学生共感性尺度合計	等分散を仮定す	.154	.697	.689	53	.494	1.780	2.584	-3.403	6.963
	等分散を仮定しない			.693	52.242	.491	1.780	2.569	-3.374	6.934
父親の夫婦満足度総得点	等分散を仮定す	1.521	.223	-8.974	54	.000	-6.746	.752	-8.253	-5.239
	等分散を仮定しない			-8.671	39.699	.000	-6.746	.778	-8.319	-5.173
母親の夫婦満足度総得点	等分散を仮定す	.006	.937	-4.703	52	.000	-4.481	.953	-6.393	-2.569
	等分散を仮定しない			-4.648	47.546	.000	-4.481	.964	-6.421	-2.542
母のソーシャルサポート合計	等分散を仮定す	.379	.541	-.973	50	.335	-2.148	2.207	-6.581	2.284
	等分散を仮定しない			-.958	43.929	.343	-2.148	2.243	-6.669	2.372

母親の夫婦関係満足度高低二群間のT検定				
母親の満足度の高低	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
父AC	低い	25	10.00	3.651
	高い	33	13.00	3.142
母AC	低い	25	11.48	3.820
	高い	33	12.82	3.601
父C0	低い	25	6.92	2.644
	高い	33	5.67	2.944
母C0	低い	25	6.76	3.854
	高い	33	5.85	3.114
被影響性	低い	25	17.44	4.214
	高い	33	16.06	4.589
他者指向的反応	低い	25	18.08	2.676
	高い	33	19.21	3.110
想像性	低い	25	18.00	4.282
	高い	33	18.09	4.193
視点取得	低い	25	16.96	3.102
	高い	33	17.09	3.116
自己指向的反応	低い	25	15.68	2.868
	高い	32	14.06	2.368
大学生共感性尺度合計	低い	25	86.16	9.081
	高い	32	84.53	10.371
父親の夫婦満足度総得点	低い	22	17.82	4.316
	高い	32	20.63	3.517
母親の夫婦満足度総得点	低い	25	13.84	3.496
	高い	33	20.73	2.661
母のソーシャルサポート合計点	低い	23	16.87	7.962
	高い	31	19.81	7.918

母親の夫婦関係満足度高低二群間のT検定										
		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限 上限	
父AC	等分散を仮定す	.844	.362	-3.357	56	.001	-3.000	.894	-4.790	-1.210
	等分散を仮定しない			-3.288	47.316	.002	-3.000	.912	-4.835	-1.165
母AC	等分散を仮定す	.594	.444	-1.365	56	.178	-1.338	.980	-3.302	.625
	等分散を仮定しない			-1.354	50.143	.182	-1.338	.988	-3.323	.647
父C0	等分散を仮定す	.210	.649	1.677	56	.099	1.253	.748	-.244	2.751
	等分散を仮定しない			1.702	54.314	.095	1.253	.736	-.223	2.730
母C0	等分散を仮定す	1.939	.169	.996	56	.323	.912	.915	-.921	2.744
	等分散を仮定しない			.967	45.293	.339	.912	.942	-.986	2.809
被影響性	等分散を仮定す	.028	.868	1.174	56	.245	1.379	1.175	-.975	3.734
	等分散を仮定しない			1.188	53.880	.240	1.379	1.161	-.949	3.708
他者指向的反応	等分散を仮定す	.044	.834	-1.456	56	.151	-1.132	.777	-2.689	.425
	等分散を仮定しない			-1.487	55.032	.143	-1.132	.761	-2.658	.393
想像性	等分散を仮定す	.034	.855	-.081	56	.936	-.091	1.122	-2.339	2.157
	等分散を仮定しない			-.081	51.254	.936	-.091	1.125	-2.350	2.168
視点取得	等分散を仮定す	.010	.919	-.159	56	.874	-.131	.825	-1.783	1.521
	等分散を仮定しない			-.159	51.949	.874	-.131	.824	-1.785	1.523
自己指向的反応	等分散を仮定す	.792	.377	2.332	55	.023	1.618	.694	.228	3.007
	等分散を仮定しない			2.278	46.223	.027	1.618	.710	.188	3.047
大学生共感性尺度合計	等分散を仮定す	.500	.482	.621	55	.537	1.629	2.624	-3.629	6.887
	等分散を仮定しない			.631	54.233	.531	1.629	2.581	-3.545	6.802
父親の夫婦満足度総得点	等分散を仮定す	.044	.835	-2.626	52	.011	-2.807	1.069	-4.952	-.662
	等分散を仮定しない			-2.527	39.037	.016	-2.807	1.111	-5.053	-.560
母親の夫婦満足度総得点	等分散を仮定す	.386	.537	-8.525	56	.000	-6.887	.808	-8.506	-5.269
	等分散を仮定しない			-8.212	43.413	.000	-6.887	.839	-8.578	-5.196
母のソーシャルサポート合計点	等分散を仮定す	.657	.421	-1.345	52	.185	-2.937	2.184	-7.320	1.446
	等分散を仮定しない			-1.344	47.411	.186	-2.937	2.186	-7.334	1.460

父親、母親の就労時間と大学生の共感性、同居家族人数と大学生の共感性との
 関連（序論 仮説④⑤の結果）

Table 5 に大学生の共感性と両親の就労時間、同居家族人数との相関を示した。両親の就労時間が短くなるほど子どもと接する時間が増え、子どもの共感性が高くなるか、また、家族数が増えると大学生の共感性は高くなるかを検討するため、スピアマンのノンパラメトリック検定で男子、女子、男女全体で相関分析を行った。

分析の結果、男女全体（ $n=64$ ）では、父親の就労時間と母親の就労時間では1%水準、家族数とは5%水準の有意な正の相関、大学生の共感性とは正の相関が見られた。母親の就労時間は、大学生の共感性と正の相関、家族数とは負の相関が見られた。家族数と大学生の共感性は負の相関が見られた。

男性（ $n=27\sim 28$ ）では、父親の就労時間と母親の就労時間に1%水準の有意な正の相関、大学生の共感性とは負の相関、大学生の共感性と家族数とは正の相関が見られた。母親の就労時間は、大学生の共感性と負の相関、家族数とは正の相関が見られた。家族数と大学生の共感性は正の相関が見られた。

女性（ $n=32$ ）では、父親の就労時間と母親の就労時間、家族数で1%水準、大学生の共感性とは5%水準の有意な正の相関が見られた。母親の就労時間は、大学生の共感性とは正の相関、家族数とは負の相関が見られた。家族数と大学生の共感性では負の相関が見られた。

これらのことから、大学生全体としては、父親、母親の就労時間が長くなるほど共感性が高くなり、同居家族人数が少なくなるほど共感性が高くなること
 が示された。しかし、男子では、父親、母親の就労時間が長くなるほど共感性は低くなり、共感性が高くなるほど同居家族人数も多くなるという、仮説通りの結果が示された。女子では、父親、母親の就労時間が長くなるほど共感性が高くなり、同居家族人数が少なくなるほど共感性が高くなるという男女全体と同じ結果が示された。

Table 5 大学生の共感性と両親の就労時間、同居家族人数との相関
 <男女全体>

		父親の就労時間	母親の就労時間	大学生共感性尺度合計	家族数
父親の就労時間	相関係数	1.000	.741**	.069	.319*
	有意確率（両側）		.000	.201	.010
	度数	445	445	343	64
母親の就労時間	相関係数	.741**	1.000	.063	-.143
	有意確率（両側）	.000		.246	.260
	度数	445	445	343	64
大学生共感性尺度合計	相関係数	.069	.063	1.000	-.050
	有意確率（両側）	.201	.246		.697
	度数	343	343	343	63
家族数	相関係数	.319*	-.143	-.050	1.000
	有意確率（両側）	.010	.260	.697	
	度数	64	64	63	64

< 男子 >

		父親の就労時間	母親の就労時間	大学生共感性尺度合計	家族数
父親の就労時間	相関係数	1.000	.796**	-.053	.119
	有意確率 (両側)		.000	.496	.545
	度数	183	183	165	28
母親の就労時間	相関係数	.796**	1.000	-.032	.149
	有意確率 (両側)	.000		.685	.448
	度数	183	183	165	28
大学生共感性尺度合計	相関係数	-.053	-.032	1.000	.089
	有意確率 (両側)	.496	.685		.657
	度数	165	165	165	27
家族数	相関係数	.119	.149	.089	1.000
	有意確率 (両側)	.545	.448	.657	
	度数	28	28	27	28

< 女子 >

		父親の就労時間	母親の就労時間	大学生共感性尺度合計	家族数
父親の就労時間	相関係数	1.000	.664**	.198*	.455**
	有意確率 (両側)		.000	.014	.009
	度数	160	160	154	32
母親の就労時間	相関係数	.664**	1.000	.154	-.314
	有意確率 (両側)	.000		.056	.080
	度数	160	160	154	32
大学生共感性尺度合計	相関係数	.198*	.154	1.000	-.012
	有意確率 (両側)	.014	.056		.947
	度数	154	154	154	32
家族数	相関係数	.455**	-.314	-.012	1.000
	有意確率 (両側)	.009	.080	.947	
	度数	32	32	32	32

第Ⅳ部 考察

第1章 結果の考察

本研究は大学生とその保護者を対象として、辻道ら（2017）の先行研究と同じく、親子関係と大学生の共感性との関連に加え、夫婦関係満足度、母親のソーシャルサポート、保護者の就労時間、同居家族人数と大学生の共感性との関連を調査分析しながら、これまで日本においてあまり注目されてこなかった父親の養育態度が子どもの共感性に及ぼす影響を探索的に検討した。

辻道ら（2017）の先行研究の検証研究として、同じ内容の質問紙調査を大学生に行い、先行研究よりさらに詳しく二次因子（受容性、統制性）をプロフィール表に沿って得点を算出したのち、親子関係診断座標に当てはめ、父親、母親の単独類型と父母の型を出した。それらの結果より、男子の母親の統制性低群を除き、男女共に父親、母親の受容性、統制性が高い群の方が共感性得点は高いことが示された。男子の母親の統制性高低群の平均値の差もごくわずかであったことから、男女共に両親の統制性低群の方が共感性が高く出た先行研究と違って、本調査では保護者の受容性も統制性も高い方が大学生の共感性が高くなる傾向にあることが示された。その要因として、本調査を行った大学は福祉系に特化した大学であることから、男女共に他者に対してより寛容である傾向にあることが考えられ、受容性であれ、統制性であれ、保護者の関与を肯定的に捉える傾向にあることが推測される。

また、大学生の共感性を高低群に分け、それぞれの群の父型、母型、父母型の度数分布を見たところ、低群では父母の統制が含まれる型がほぼ見受けられず、拒否的自律型が多くなっていた。共感性高群では、統制が含まれる型も見受けられ、受容的自律型が最も多くなっていることは低群にも見られた。このことから、高低群に関わらず、本調査を行った大学の保護者の傾向は、子どもの自律性を尊重するタイプ、自律性を尊重しつつ、子どもを承認、受容する愛情豊かなタイプの親が多いことが示された。高群と低群の分かれ目は、全く自律（放任等）されるよりも、ある程度の統制（しつけ等）があり、全くの拒否（受容の対極）よりは、どの程度受容的態度が見られるかという点にあるのではないかと考えられる。父母型においても高低群に差はなく、どちらの群も両親が子どもに対して共通の態度や行動を示す同調型、または、やや父母の色合いが違うがそれに近い協調型の夫婦が圧倒的に多いことが示された。これらの傾向から、夫婦が足並みをそろえて子育てに取り組んでいることが伺え、バブル全盛期に学生生活や就職を経験した親世代の自由奔放でのびやかに過ごしてきた自らの経験が、子育てにおいても反映されている可能性が推測される。

加えて、前原ら（2014）による先行研究において、子どもに対する父親の養育の行動と意識に最も影響を与えていた要因は夫婦関係満足であったという結果が示されたことから、本研究では大学生の保護者を対象に夫婦関係満足と母

親のソーシャルサポートを尋ねる質問紙調査を行い、夫婦関係満足と親子関係、子どもの共感性、母親のソーシャルサポートとの関連を検討した。翌週から3週に渡って保護者が回答したものを学生が持参して提出する形をとったが、親元を離れて暮らしている学生も多く、回収率が全体の20%程度であったため、結果を一般化するには、もう少し十分なデータ数が必要であると考えた。そのため、大学生を男女別で検討することは避け、夫婦関係満足度を平均値で高低二群に分けて大学生男女全体で差を検討したところ、父親の夫婦関係満足度が高い群の方が父親の受容性得点が高く、子どもの共感性の下位尺度である他者指向的反応や視点取得、母のソーシャルサポート得点も高群の方が高かった。共感性の下位尺度の中でも他者指向的反応は「まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといいなあとと思う」等であり、視点取得は「自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。」等である。いずれも下位5尺度の中でも他者に焦点が向けられた項目（「方法」の章を参照）であることから、父親の夫婦関係満足度が高くなれば、受容的養育態度も高まり、子どもの共感性の中でも特に他者を理解しようとする項目や、相手の立場を受け入れることが求められる項目が高くなることが示された。また、母親の満足度高群でも、父親の夫婦関係満足度高群で見られた結果と同じ項目が高くなるという結果であったが、違いは、「面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する」等の想像性が高くなるという結果がさらに得られたことであった。これらのことは、(本研究において焦点となる)父親の夫婦関係満足度が高くなれば父親の養育態度も高くなるという前原ら(2014)の研究と同様の結果となり、父親の養育態度が高くなれば、子どもの共感性の中でも他者に対して寛容であり、理解しようとする態度が見られる項目が高くなることは、受容的な親子関係が幼稚園児の向社会的行動と関連するという森下・庵田(2005)の報告と何らかの関連が示唆される結果となったと考える。また、高い夫婦関係満足度は母親の高いソーシャルサポート得点に支えられているという結果も得られたことから、本研究の仮説は、部分的に実証されたと考える。

しかしながら、共感性尺度全体の総合得点としては、父親、母親の夫婦関係満足度高低二群間においては、どちらも低群の方が得点が高いという結果が示された。本研究で使用した共感性尺度全24項目は下位5尺度で構成されているが、父親の夫婦関係満足度低群の方が高かった下位尺度は、被影響性、想像性、自己指向的反応であり、母親の夫婦関係満足度低群の方が高かった下位尺度は、被影響性、自己指向的反応であった。本研究で使用したMESの作成者である鈴木・木野(2008)の報告では、被影響性は他者指向的応答所産と自己指向的応答所産の並行所産であり、自己指向的反応は自己に焦点づけられた情緒反応だという。父親の低群にのみ見られた想像性も自己を架空の人物に投影させる認知傾向を表す自己指向的応答所産である。これらのことから、夫婦関係満足度から子どもの共感性を分析研究するにあたっては、共感性下位5尺度の合計

得点を一括りにして高低を見るよりは各尺度に分けて検討を行うのが妥当であると考え。とすれば、夫婦関係満足度が高くなれば、子どもは認知的、情動的側面の両方で他者指向的な応答所産である項目の得点が高くなり、自己中心的な立場を抑えて相手の立場を受け入れやすくなることが考えられ、逆に夫婦の満足度が低くなれば、自己指向的な応答所産である項目の得点が高くなり、自己を理解しようとするのが目的の認知過程を取れば、むしろ自己中心的な考えを抑える必要がなくなるという傾向になりやすいと考えられるのではないかと推察する。このことは、首藤（2006）の先行研究による、幼児期の女子は母親の父親への関わり方や意識の持ち方、父親と自分との関係を通して共感性を発達させる可能性があり、幼児期の男子の共感性の発達には、父親の母親への関わり方や意識の持ち方が重要であるとの報告と部分的に同じ結果が得られたのではないかと考える。つまり、子どもの共感性発達は大学生になっても幼児期と同様の傾向にある可能性が考えられるが、今後はより多くの保護者のデータを分析調査することが望まれる。

最後に検討したのは、両親の就労時間と同居家族の人数が子どもの共感性に影響を及ぼすかという事であったが、男女全体と女子では、両親の就労時間が長くなる程、共感性が高くなり、同居家族の人数が少ないほど共感性が高くなるという結果が示された。男子は全く逆の結果であり、父親、母親、それぞれの就労時間が長くなるほど共感性は低くなり、同居家族の人数が多いほど共感性は高くなるという結果が示された。このことは、女性は、両親の働く姿を肯定的に受け止める傾向にあるが、より親密な親との関わりによって共感性を育ませることが推測される。一方、男性では、両親が家にいる時間が長くなる程、また、同居家族の人数が多いほど共感性を育ませる傾向にあることが示された。Baron-Cohen（2003）は共感に対する男女差の中で、人間関係において、特に友人関係では、女性は感情のつながりを重視して親密さを求めるのに対して、男性は同じ目的に向かう活動をするための仲間を求める傾向にあるとの見解を示している。性差間で同居家族の人数と共感性の高さに違いが見られたのはこのことに関連する可能性も考えられ、両親の就労時間との関連においても男女間で共感性発達のメカニズムが異なる事が示唆された。

第2章 総合考察

本研究で得られた結果から、テーマである「父親の関わり」について総合的に考察すると、子どもに対する受容性、統制性が高く養育態度が高くなるほど子どもの共感性は高くなり、父親の夫婦関係満足度が高くなるほど、子どもに対してより受容的な養育態度を示し、夫婦関係満足度が高いほど、共感性の中でも他者を理解しようとする視点取得、他者を受け入れようとする他者指向的の反応が高くなることが実証された。加えて、子どもが男性の場合は、父親が家で過ごす時間が長いほど、また、一緒に暮らす家族の人数が多いほど子どもの共感性が高くなるという事も示された。母親に関しては、夫婦関係満足度が高

くなるほど、子どもの視点取得、他者指向的反応に加え、他者の立場に自己を置くという点において視点取得と同様の認知過程を取る想像性も高くなる傾向にあることが示された。子どもが女性の場合は、親の就労時間が長くても、親密な養育態度で接することで、共感性を育みやすい傾向にあることも示されたと考える。よって、本研究は、カナダ政府公衆衛生庁（2009）の報告にあるように、近年の欧米で見られる父親の関わりが子どもの発達に重要な役割を果たすとされている見解と部分的には一致した結果が得られたのではないかと考える。また、高い夫婦関係満足度の背景には母親の高いソーシャルサポートの存在があることも示唆され、本研究の仮説は概ね実証されたと考える。

これらのことから、本研究によって夫婦関係満足度が高い夫婦は養育態度も高まり、そのような両親の元で養育された子どもの共感性は視点取得や他者指向的反応が高くなることが示されたこととなり、これまで日本においてあまり注目されてこなかった父親の養育態度の促進に少しでも寄与するきっかけとなることが期待される。また、他者を理解しようとする視点取得は、社会生活を送る上で非常に重要であると考えられ、本研究によって示された結果が、これから社会に出て、家庭を築いて行くであろう大学生だけでなく、全ての人にとって、より良い子育てや夫婦関係、人間関係の形成の一助となる事を切に願うばかりである。

本研究の結果として、夫婦関係満足度高群を中心に考察を述べてきたが、低群の結果を精査する時、親子関係と夫婦関係が相互に影響を与え合って複雑な家族関係を構成していることが推察される。共感とは、円滑な対人行動を促し、他者理解を深め、関係の質を高める重要な要因であることが示されている（澤田、1992）。首藤（2006）によれば、夫婦間の共感とは夫婦の質を高め、家族システムのダイナミズムを通して、家族の成長に寄与すると考えられるという。しかし、今後の課題として、父親、母親共に夫婦関係満足度高群の大学生の共感性総得点が低くなった要因や心理的メカニズムの解明が望まれる。また、女性については両親の就労時間が長いほど、家族の人数が少ないほど共感性総得点が高くなったことから、現代の大学生の結婚観や家族観などについて男女別に詳しく調査することで、より興味深い研究になると考える。

参考文献

- 浅田晃佑 (2017). 発達障害と共感性の新しい見方 教育と医学, 20-26.
朝日新聞朝刊 (2017.4.20). 夫は発達障害 知って救われた P26.
- Baron-Cohen, Simon (2003). *The Essential Difference : Male And Female Brains And The Truth About Autism*, Basic Books. サイモン・バロン＝コーエン／三宅真砂子 訳(2005). 共感する女脳, システム化する男脳 NHK 出版.
- Batson, C. D. (2010). *Altruism in Humans*. New York : Oxford University Press. 菊池章夫・二宮克美(訳) 利他性の心理学：実験社会心理学からの回答 新曜社.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy : A social psychological approach*. Colorado : Westview Press.
- 古川(笠井)恵美・内藤孝子・松嶋紀子(2009). LD等の発達障害のある高校生の保護者の心配 川崎医療福祉学会誌, 19, 1, 47-58.
- Ghemawat, P. (2007). *Redefining global strategy. Crossing borders in a ward where differences still matter*. Boston : Harvard Business School Press.
- 長谷川寿一 (2015). 共感性研究の意義と課題 心理学評論, 58, 3, 411-420.
橋本俊顕 (2012). ヒトでの発達障害の病態：自閉症スペクトラム障害、注意欠陥／多動性障害を中心に 日本毒性学会学術年会, 39, 1, S5-3.
- Hoffman, M. I. (1990). Empathy and justice motivation. *Motivation and Emotion*, 14, 151-172.
- 井芹まい (2017). 大学生の共感性研究の動向 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊, 24, 2, 99-107.
- 石戸 光 (2007). 地域規模の公共経済哲学を見据えて一異質な他者との対話の可能性一公共研究, 4, 105-122.
- 北川憲明・七木田 敦・今塩屋隼男 (1995). 障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響 特殊教育学研究, 33, 1, 35-44.
- 小枝達也 (2017). 5歳児検診：20年間の経験 認知神経学, 19, 1, 7-13.
厚生労働省 (2016). 発達障害者支援法の改正について P5.
- Lamb, M. (1975). Fathers : Forgotten contributors to child development. *Human Development*, 18, 245-266.
- 前原敬子・齋藤ひさ子 (2014). 学童期後期の子供に対する父親の養育の行動と意識に影響する要因 日本助産学会誌, 28, 2, 144-153.
- 森下正康・庵田奈甫 (2005). 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング 和歌山大学教育学部教育実験総合センター紀要, 15, 47-56.
- 尾形和夫 (2004). 父親の母親の養育行動に及ぼす要因に関する再考一父親の家

- 事への援助，家族とのコミュニケーションを中心とする分析— 學校法人昌賢学園論集 3, 71-85.
- 岡野維新・武井祐子・寺崎正治 (2012). 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親の母親に対するサポート 川崎医療福祉学会誌, 21, 2, 218-224.
- Public Health Agency of Canada (2009). The Father Toolkit, P5.
- 澤田瑞也 (1992). 共感の心理学：そのメカニズムと発達 世界思想社.
- 澤田瑞也 (1998). カウンセリングと共感 世界思想社.
- 白濱あかね・志方亮介・五位塚和也・古賀聡・遠矢浩一(2016). グループセラピーにおける他児への注目を促す関わり—衝動性および他者理解の困難を示す男児の共感性に注目して— 九州大学総合臨床心理研究, 8, 141-152.
- 首藤敏元(2006). 幼児の向社会性と親の共感経験との関連 埼玉大学紀要 教育学部(教育学科学), 55(2), 121-131.
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院人間教育発達研究科紀要, 47, 269-279.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 田村和恵・佐々木秀美 (2012). 看護場面において患者が知覚する看護師の優しさ 看護学統合研究, 14, 1, 13-45.
- The Fatherhood Institute (December 2010, P5). Children's behaviour at school.
- 辻道英理奈・植田瑞穂・桂田恵美子 (2017). 大学生の向社会行動および共感性と親子関係との関連 関西学院大学心理科学研究, 43, 49-54.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ (1986). 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, 34, 4, 324-331.
- 山岡祥子・中村真理 (2008). 高機能発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識—父と母との相違— 特殊教育学研究, 46, 2, 93-101.
- 山岸由佳 (1999). 共感性の発達とその意義, 東京学芸大学 99年度学部3年生展望論文

謝辞

本論文を作成するにあたり、論文作成の初歩から懇切丁寧にご指導を頂きました関西福祉科学大学大学院教授 亀島信也先生に心より厚く御礼申し上げます。

また、質問紙調査にご理解と、快くご協力を頂きました同大学院教授 遠藤洋二先生はじめ、ご指導を賜りました同大学院の多くの先生方に厚く御礼申し上げます。

統計ソフトの使用に際しては亀島先生のご指導のもと、同期の院生の上村直哉さん、萬谷麻衣さんをはじめ、院生の皆さんからアドバイスを頂き支えて頂きました。また、亀島ゼミの森川貴嗣先輩には温かな励ましとアドバイスを頂き支えて頂きました。皆さま、本当にありがとうございました。

そして、質問紙調査を実施する際に、お世話になった亀島ゼミの学部生の皆さん、ご回答くださった保護者の皆さま、学部生の皆さんには、感謝の念にたえません。

本論文を作成するにあたって、お世話になった全ての方々に心より御礼申し上げます。